

英語の完結相と非完結相

山下 美津子

Perfective and Imperfective in English

Mitsuko YAMASHITA (Nieda)

Received October 27, 1987

抄録 アスペクトは事態の構成に対する異った見方に関するものであり、「時」「過程」「視点」がアスペクトを構成する主要部である。時は限定されているか否か、過程には変化があり終了点があるか絶えず均質で続いているか、視点が終了点にあるか過程の内部にあるかがアスペクトの解釈上重要である。アスペクトは完結相と非完結相に分かれ、事態全体が完結してしまった一つのものとみなされるか、完結とは関係なしに事態の内部が見られているかによって区別される。完結相と非完結相の根本的な違いは全体を一つと見る全体性と部分でも真である部分性にある。英語には完結、非完結相を表す特別な文法形式はなく、アスペクトは種々の要因で決定される。動詞の境界性に関する内在素性を中心となり、目的語の有無、目的語の個性性の強さ等の要因によって述部の全体性、部分性が性格づけられる。それに主語の個性性も関与して文のアスペクトが解釈される。また他動性の強さと完結相には強い関係がある。

索引語 完結相 非完結相 全体性 部分性

Abstract. Aspects are different ways of viewing the internal constituency of a situation. Time, process, and viewpoint are important constituents of aspect. Whether the time is definite or indefinite, whether the process changes or is homogeneous, whether the viewpoint is set on the terminal-point or within the process, are very important in terms of interpretation of aspect of the sentence. Aspect is classified into 'perfective' and 'imperfective'. Situations are regarded as complete events as a whole in perfective, while they are viewed within in imperfective. The basic distinction between perfective and imperfective is similar to the count/mass distinction, and can be represented as totality/partitivity opposition.

In English there are no special grammatical forms for perfective and imperfective. Various features bring about a good interpretation of aspect on the sentence. An inherent feature of verb, bounded, holds a key to determine the aspect. A bounded or nonbounded feature of the verb, the number of participants, affectedness and individuation of the object cooperate to give the predication of the sentence totality or partitivity. Individuation of the subject also intersects an interpretation of aspect. The sentence with high transitivity is likely to be interpreted as perfective. There is a strong relation between transitivity and perfective.

Key Words. perfective, imperfective, totality, partitivity.

1. 序

動詞に関する重要な文法範疇に相、つまりアスペクト (aspect) があるが、英語においては、同じ動詞に関する範疇である時制や態に比べると重要視されない傾向にある。アスペクトは時制

との関係で論ぜられるか、完了形、進行形という特殊な構文との関連で述べられがちで、独立して扱われることは少ない。これには多くの理由が考えられるが、一つは、同じ「時」と関連するものでも、相は主観によるところが多く、比較的客観的な時制に比べると分かりにくいという点である。二点めは、英語はロシア語のように完結相を表わしているのか非完結相を表わしているのか文法上区別する文法構造を持っておらず、英語には完結、非完結を直接区別する手段がないという点である。ある種の動詞については進行形が非完結相を表わすと考えられるが、非完結相はすべて進行形で表わされるわけではなく不十分である。第三点めは、第一、第二点とも関係があるが、アスペクトには定まった認識手段がないため、どこまでアスペクトの範疇と考えるのか、例えば、どこまで動詞の内在する意味が関与しているのか、どこまでが時制の機能なのか、どこがアスペクト本来の範疇なのかははっきりしないため、議論をする際にも共通枠が明確ではなく、話がちぐはぐになってしまいがちであるという点である。

本論文では、先の第三点めの問題から始める。つまり、アスペクトとは何なのか、完結相、非完結相の本質を、アスペクトの主要な構成部である「時」と「過程 (process)」を中心に考察する。時はいかなる関係の仕方をするのか、又、過程については名詞の可算性、分割性などとの関係づけでみていくことにする。次に、第二点めに注目し、英語ではアスペクトはどのように構成されるのか、動詞を中心として、アスペクトに関与する特性をさぐっていく。その構成する要素と、他動性のそれとの類似性を見ることによって、他動性とアスペクトの関係もみていくことにする。最終的にアスペクトには何が重要なのかを追求するのをこの論文の目的とする。

2. アスペクト：完結相と非完結相

2.1. アスペクトの領域

先にも述べたように、ロシア語では完了形、未完了形という動詞の語形変化によって、完結相、非完結相を示すが、英語にはそのような明瞭な文法形式がない。従って、Zandvoort (1962) はアスペクトはスラブ語の文法範疇であり、それを英語にもちこむことは見当違いの着想であるとしている¹⁾。が、Zandvoort の考えは文法形式の面からのみ述べたものであり、アスペクトは本来、動作・状態が完了したか否かという見方、つまり事態 (situations) の内部に対する見方に関するものであるから、英語にその見方そのものが存在しないということにはならない。独立した文法形式にどの程度表われるかは言語によって異なるが、英語を問わず全ての言語にアスペクトの概念は存在すると思われる。むしろ同じアスペクトの概念を表わす手段が各言語で異なると考えた方が自然である。後で詳しく述べるが、英語では主に完結相を表わす文に用いられる動詞は、歴史的現在か、職業、現在の習慣を示す場合を除いては過去形でしか用いられない。このようにアスペクトは時との関係を抜きには考えられない。歴史的に見ても、古くは全ての印欧語にアスペクトを直接表わす文法形式が存在したが、それが次第に時制に発達していったと言われるように、多くの言語では、完了形を用いた文の完了形は、過去の出来事を示す過去時制の一つとして用いられている (英語の完了形は特殊な性格を持つので次の節で述べる)。話者の事態がすでに完結してしまったことと見る見方を示す形が、すでに「今」よりも前にその出来事が起ったことを示す形に変わっていき、話者の見方の方は他の部分で表わすようになったと考えられる。つまり、アスペクトのもつ「時」の前後関係を示す部分が独立して時制としての機能を果し、話者の見方の方は、時制との関係をも持ちながら文を構成する他の部分で表わされていると考えられる。

次にアスペクトは、動作・状態の様相のとらえ方ではあるが、どの程度までアスペクトと考えるべきか考察してみよう。アスペクトの研究について、よく対比的に出されるのが、Aktionsart (為相) と Aspekt (アスペクト) を区別する Deutshbein (1916:1939) に始まった研究と、Charleston (1955) の phase aspect と section aspect を区別するやり方である。どちらも内容的に大きな隔りがあるわけではなく、動詞に内在する性質を文法範疇から区別する必要性を説いている。Aktionsart はほとんど文法範疇とは関係なく、動詞の内在する意味によるものである。同様に、section aspect の分類を見ても、例えば起動相 (inchoative aspect) を表わすのは BEGIN, COMMERCE, START などいわゆる起動を意味する起動動詞 (inchoative verbs) であり、継続相 (durative aspect) は動詞の意味と形式とが混っている。Comrie (1976) も、Aktionsart と aspect (=aspekt) と区別する必要があると言っているように、特定の動詞の内在する意味が、動作・状態の様相を表すのは辞書的 (lexical) な事柄であり、語の意味から離れて存在する本来のアスペクトと区別すべきである。従って、この論文においても、動詞に内在する相的意味をできる限り排除し、文法範疇としてのもののみをアスペクトと呼ぶ。アスペクトは事態をどのようにみるか、その見方であるが、詳しくは「ある事態が、話題としている時点で、完了しているものをみなすか、未完了な状態であると見ているか」という話者の見方である。英語の時制は、アスペクトに関することでも多少含み簡単には分けられない点もあるが、話者が「話しをしている今、現在 (以後 P と略記)」を基準にして「事態がそれより前に起ったか、その附近であるか」とみなす点を、時の流れにそって図 1 のように線状に表わすことができる。× は話題となっている時点、つまり話の視点が起かれている点である。

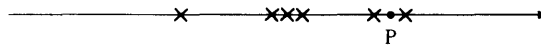


図 1

これに対しアスペクトはある事態が、ある時点—P とは限らない点—で、すでに完結してしまっているか否かに関するものであり、その話題となっている時点が場合によって変わり、その時その事態を表わす文の動作・行為・状態 (以後、過程=process と呼ぶ) がどのようなものであるかということであり、複雑化する。図 2 のように、アスペクトを考える時には時と過程と、視点の三点を考えねばならない。

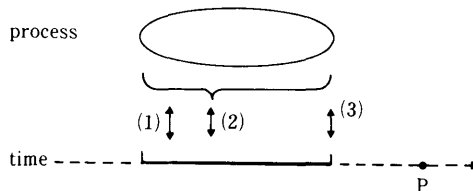


図 2

図 2 では、○ が話題となっている行為を表わす (場合によっては行為のところが状態のこともある)。破線は時の流れ、実線は、その行為が行なわれた時間である。↓ で示した視点は、例えば (1), (2), (3) のような時が考えられる。これらについては 2.2. で詳しく検討する。これから以後、話題となり視点となっている時点ですでに事態が完結してしまっているアスペクトを、完結相

(Perfective: 以後 Perf. と略記), 完結していない方を非完結相(Imperfective: 以後 Impf. と略記)と呼び議論を進めていくことにする。

2.2. 完了形と進行形

アスペクトを調べていく上で最も困難な点は、Perf. と Impf. を直接示す文法形式が存在しないからであると序で述べた。アスペクトを見る上でどうしても Charleston, Curme (1931) の研究に見られるように動詞の内在的意味を完全に無視することは困難である。ここでは特定の動詞のもつ「相的な意味」はできるだけ排除するが、当然、動詞の内在する特性はアスペクトに強く関与しており、英語ではアスペクトを統語形式にのみ限定することはできない。アスペクトの主要な構成要素である「時」と「過程」のうちの「過程」の中心は動詞であらわれ、3.1.でみるように動詞の性質が重要である。又、動詞の特性だけでなく、目的語、主語なども性質も大きな役割を果たす(三章参考)。一方、Quirk et al. (1972, 1985) はアスペクトを統語形式に限っており、英語には2つのアスペクトの対比があるとしている²⁾。一つは perfective 対 non-perfective であり、もう1つは progressive 対 non-progressive であり、それぞれいわゆる完了形と進行形を問題にしている。この統語形式に限るという試みは明瞭で理解しやすいが、この形だけでは、我々の考えるアスペクトのごく限られた一部しか考慮に入れられなくなる。ここでは完了形(have + 過去分詞)は完結相と区別して考える³⁾。完了形は「過去の出来事を現在と結びつける」役割が中心であり⁴⁾、完了形を完結相と同一視するのは狭すぎる見方である。従って、この論文では特別な場合を除いて完了形を用いていない文の一でできるだけ核となる文に近い文—アスペクトを考察する。Progressive 対 non-progressive の対比は、いわゆる進行形に関してであり、ある種の動詞は progressive-form (be + V-ing) といっしょになって、Impf. を表わすことができる。しかし、進行形で表わされる文のアスペクトは Impf. の一部のアスペクトしか表わさない。又、non-progressive で表わされる文も Impf. のアスペクトを持っているものも多くある。後で述べるように、ここでは進行相(Progressive: 以後 Prog. と略記)を Impf. の一部であると考え。が、進行相(Prog.)は Impf. の一部であり、Prog. だけみるのでは Impf. 全体を論ずる場合には狭すぎると思われる。又、英語の progressive-form は非常に広い意味領域を持ち、progressive-form で表わされた文がいつも Prog. を表わすと考えてはならない。この論文では、特別のことわりなしでは進行形の用法のうち Prog. に関係するもののみを用いることにする。

2.3. 主要構成部

2.3.1. 過程 (process)

アスペクトは、事態に対する見方に関することであるから、下位範疇をさほど細く分類する必要はなく Perf. と Impf. に二分するので十分であり、その他に時制との関係で特別な反復(iterative)と習慣(habitual)、そして先の Prog. を下位範疇に入れる以外には必要ないと思われる。つまり、継続相、起動相、瞬間相等はアスペクトの直接の下位範疇ではなく、それぞれのアスペクト(Perf. か Impf.)に、動詞の内在的意味が加わったと解釈する。

完結相(Perf.)はどのようなものかさらに詳しく見てみることにする。Perf. は過程が「完結した」という「完了」を強調するのではなく、話題となっている時点では、事態を一つの完結した事態であると見ていることを示すものであると考えられる。Perf. では事態全体を一つの固まりのようにとらえている。つまり、過程の始まりと終りがあるとみなされ、その間中、過程は変化しており、話題となっている時点(視点)では、その過程は変化を終え、事態は一つの完結してしまっただけとして見られている。一方、Impf. はそれができない。つまり、話題となってい

る時点では、過程は完結しているとみなされてはならず、それ以前、以後にも過程は続いている可能性があることを示す。従って、その過程全体を一つの固まりとしてみなすことはできない。次の例文(1)は Perf. であるが、Mourelatos (1981) が指摘しているように⁵⁾、(1)の文は、もともとの動詞が⁶⁾ gerund か deverbative noun の形で名詞化され、文全体が⁶⁾ there is ~ という存在をあらわす文に変えられる。

(1) Mt. Mihara erupted. $\longleftrightarrow$ There was an eruption of Mt. Mihara.

(2)⁶⁾ Mary capsized the boat. $\longleftrightarrow$ There was a capsizing of the boat by Mary.

ここで注目すべきは、process を名詞化する際に、不定冠詞 *a* がつくことである。Mourelatos によると、頻度をあらわす副詞は、数をあらわして名詞を修飾し、名詞は複数化する⁷⁾。

(3)⁸⁾ Vesuvius erupted three times. $\longleftrightarrow$ There were three eruptions of Vesuvius.

不定冠詞 *a* は一つという意味で、我々の「一固まりとみなす」ということに通ずる。くり返しについては、2.3.2.でもう一度言及するが、複数になるということは、行為が一つ、一つの固まりとみなしうるからである。従って、Perf. は過程を○、○などで図式化できる。例えば、(1)、(2)は、図3に、(3)は図4のように図式化できる。

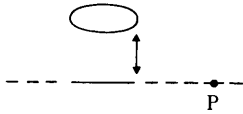


図3

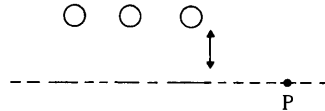


図4

これに対し、Impf. では話題となっている時点では、過程は完結しておらず、当然一つの完了した出来事と事態を見ていない。同様に名詞化すると、(4)(5)のように不定冠詞 *a* はつかない。

(4)⁹⁾ John pushed a cart for two hours. $\longleftrightarrow$ For two hours there was pushing of a cart by John.

(5)¹⁰⁾ Helen dominates her husband. $\longleftrightarrow$ *There is a dominating by Helen of her husband.
 $\longleftrightarrow$ There is dominance of her husband by Helen.

過程全体を一つとみなしていない証拠として、不定冠詞 *a* がついていないことがあげられる。(4)の場合、2時間の間どの時点でも視点にしても、John pushed a cart という事態である。つまり動作開始後10分後でも1時間後でも2時間たつまでは John finished pushing a cart とは言えない均質な行為が続くのであり、(1)、(2)のように過程全体を○で一固まりとして描くことはできない。行為を○であらわし、その連続であると考え、John pushed a cart は図5のように図式化できる。

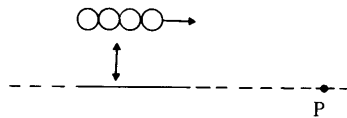


図5

(5)は行為ではなく状態を表わしており、(4)同様、視点を变えても均一な状態が続く。図6で示さ

れるのは(5)の例文の場合である。

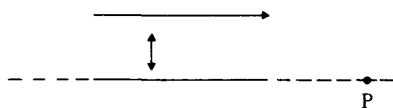


図 6

以上のことから、我々は、Perf. と Impf. の過程の違いは、事態全体 (Total) を問題とするか、事態の過程の内部の構造を問題とするかであると考えることができる。Impf. は、均一な行為・状態が未完了のまま続いているのであるから、全体を見なくても、その一部でも同じということになる。これについて、Langacker (1982, 1987), Mourelatos (1981) は動詞 (あるいは過程) に対する perfective/imperfective と名詞の count/mass との類似性を強調している。

この点をさらに詳しく見る上で、またアスペクトを見る上で非常に重要な動詞の分類がある。Vendler (1965) の activities, accomplishments, achievements, states の分類である。この分類のアスペクトを見る上での有意義な点は、動作・行為の終了点を考えている点と、時と行為の関係に言及している点である。動作か状態かという面から見ると、activities, accomplishments, achievements が 1 つになり、states が区別される。しかし、一つの行為が完結する点、terminal-point を含んでいるかどうかによって区分すれば、accomplishments と achievements が必要とするので一つのグループに、必要としないので、activities と states が一まとめになる。Accomplishments と achievements には終了点が含まれ、その前後では事態に変化がある。achievements は必ず終了点がなくはないが、accomplishments には動作の開始点と終了点と両方が含まれている。下の例文はそれぞれ accomplishment と achievement を示している。

(6) John wrote the letter.

(7) John reached the submit.

Vendler (1965) は achievement verbs は progressive-form をとれるが、achievement verbs はできないとしている。このことは、accomplishments は、過程が書き始めから書き終わりまで期間を要するが、achievements は終了点の瞬時のみが問題であることを示している。従って、行為の完了途中で焦点をあてることは、achievements には不可能である。図式化すると、(6)が図 7、(7)が図 8 のようになる。

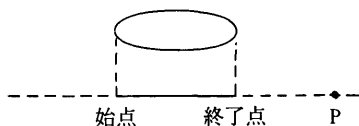


図 7

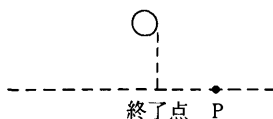


図 8

一方、(8)は activity, (9)は state であるが、どちらも行為・状態の終了点は必要ない。

(8) John pushed a cart.

(9) John liked Mary.

(8)は行為が続いており、(9)は状態が、均一の状態が続いている。(8)を図 9、(9)を図10で図式化す

ると次のようになる。

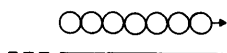


図 9

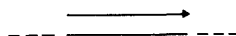


図10

このように Vendler の動詞の分類は、アスペクトを見る上で重要なポイントを提示しており、図からもより明らかなように、accomplishments と achievements が Perf. に、activities と states が Impf. に関係している。が、Mourelatos (1981) が指摘するように、Vendler の言及が動詞の verb aspect の領域にとどまっているのは狭すぎると思われる。この概念の規準は事態 (situation) のところまで拡大しうるし、そうすべきである。ある特定の動詞を、どれか一つに決めてしまうことは、極一部の動詞を除いて不可能である。しかも、Vendler 自身、議論は絶えず文全体の situation のレベルで行うか、過程の内容について述べており、決して動詞自身のみのアスペクトで終わっていない。むしろ、situation としての accomplishment を表わす文の動詞は accomplishment verb と呼ぶと考えた方が、Vendler の考えに近いと思われる。Mourelatos (1981) は Vendler の activities をあらわす situation の名を ontology の立場から process, accomplishments を development というように、states を除いて用語を変え、分類しなおしている。¹¹⁾ Mourelatos (1981) は、まず、situations を states と occurrences (=action) に分け、後者を processes (= activities) と events に分けている。しかし、アスペクトを中心に見るならば、状態か動作かで分けるよりも、まず完結する点を含んでいるか否かで分け、それ以降、状態か動作かで分ける方が適切である。又、基本的には同じ考えなのであるから、わざわざ用語を ontology に関するものに変える必要もないと思われる。従って、ここでは Vendler の用語をそのまま拡大して situations を表わすのにも用いることにする。States と activities は、accomplishments, achievements と異なって、終了点を必要としないだけでなく、過程の均一性ということで特徴づけられる。Accomplishments と achievements においては過程は均一ではなく変化している。前者は、水などのような、mass noun と類似した性格を持ち、少量の一部でも、多量でも、質は均一である。つまり、一部をとり出すことができる。Mourelatos は、mass noun との類似性から、これらの predication を mass-quantified¹²⁾ という用語を用いているが、ここでは、名詞を連想させる名前より、共通点を取り出して、部分を見ても同じなので部分的な事態 (partitive situation) と名づける。これに対し、accomplishments と achievements には終了点に向って、過程は変化するので、行為全体を一つと見るため、数えることが可能であるので、count noun と類似した点をもつ。Mourelatos はこのような predication を 'count-quantified'¹³⁾ と呼ぶが、ここでは、過程及び事態を分けることはできず、全体を見なくてはならないので、全体的な事態 (total situation) と呼ぶことにする。以上のことをまとめると表 1 のようになる。

2.3.2. 時

Perf. と Impf. の違いは過程を見ることでいくらか明らかになったが、ここでもう一つの主要な構成部である「時」についてその特徴を見ていくことにする。アスペクトが「時」に関係していることに対して疑問は無いが、どのようにアスペクトとかがわっているのだろうか。Langacker (1982) はアスペクトを過程のレベルで考えているが、時と過程がアスペクトに関係しあっていると考えるのは我々と同じである。ただし、State は, Imperfective process に入るとしなが

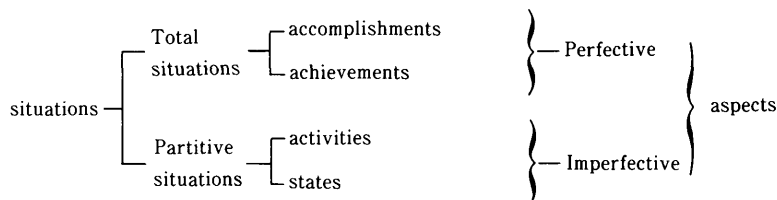


表 1

らも、アスペクトを表わす過程として、Imperfective, Perfective process と並べて書いている¹⁴⁾。それぞれの過程の時の特徴は、(1)前後どちらの方向にも限定なく広がっていく線で、(2)ある限定された長さをもつ境界を持った分節された線で、(3)長さを持たない、分節された線の限られたものである点であるとして、次のように示している¹⁵⁾。

- (a) IMPERFECTIVE PROCESS
 (b) ——— PERFECTIVE PROCESS
 (c) STATE

Langacker(1982)は、STATE¹⁶⁾は‘a point’と「点状の時」を示すとしているが、これは時間的には Imperfective process と同じく、定っていない時間を持っていると考えた方が良いと思われる。Langacker によれば、Imperfective も、Perfective process も瞬時である点状ではなく、ある期間を持つことになる。ここで、過程に関連ある時が、期間(duration)を要するものなのか、そうでないのか検討してみる。過程の長さは、共に表われうる副詞である程度特徴づけられる。Accomplishments と activities は momentaneous adverbials (瞬間副詞) と共に表われることはできない。

- (10) *He ran a mile at that moment.
 (11) *He walked around at four o'clock.

これに対し、states, achievements は共に表われることができる。

- (12) He remembered the address at that time.
 (13) He closed the door at that point.

しかし、accomplishments は durative adverbials とは共に表われない。

- (14) *He ran a mile for five minutes.

State は durative adverbials とともに表われる。従って state が瞬時であるというのは正しくない。

- (15) He remembered the address for three months.

しかし、achievements は、durative adverbs とは共存できない。このことは、過程が行為が達成されたその瞬間であることと結びつく。

- (16) *He closed the door for two minutes.

従って、Langacker のように簡単に、perfective も imperfective も期間を示すとは言えない。この

ようにみると, accomplishments は期間は表わさないように見えるが, for ~ という形の期間を表わす副詞ではなく, in ~ という完結を表わす副詞となら共存できる。

(17) He ran a mile in five minutes.

又, Vendler が指摘しているように, accomplishments は *For how long ~?* という疑問には答えられないが, *How long does it take to ~?* という疑問文には答えられる。Activities は逆に *How long does it take to ~?* の文には答えられないが, *For how long ~?* の文には答えられる。States も同様である。このことから, activities と states は先に process のところでみたとおり, 均一, 同質の過程が変化なく続くが, accomplishments は行為の始点から終わりまでの限られた期間を一つに考えており, その間均一な行為がなされているのではない。瞬間を表わす副詞が states と activities とも共存できるということは, この過程の間のどの時間をとっても, *he remembered the address* と *he walked around* が真であることを意味している。ここで重要なことは, 視点とされる時が, Impf. の時は定まっていないということである。それに比べて, accomplishments と achievements に関しては期間, 瞬時という違いはあっても, 視点となる時は限定されているという点が同じである。このことを考えると, Langacker の perfective process は「限定された長さの境界 (boundaries) を持つ」という言及は accomplishments には正しく, 「限定された」という箇所は achievements にもあてはまる。Vendler も, accomplishments は “notion of *unique and definite time periods*”⁽¹⁷⁾, achievements は “*unique and definite instant*”⁽¹⁸⁾ を含むとしている。アスペクトを問題にする時, 「時を含んでいる」というだけにとどまらず, 「過程の一定の限定された時を話題とし, その時に視点を置く」と考えるべきである。一方, states についても我々と同様に Vendler も “time instants in an *indefinite and nounique sense*”⁽¹⁹⁾ を含んでいるとし, activities は “periods that are *not unique or definite*”⁽²⁰⁾ を必要としているとしている。アスペクトを見る時, Impf. は「過程の中の限られないどの時をも話題とし, その時に視点を置いている」と考えられる。

今までのことをまとめると, 下の図で明らかなように, アスペクトと時のかわり方は「長さ」ではなく, 「視点は, 過程の定まった時にあるか否か」という「限定性」にかかっている。Impf. は従って, 過程の内部の事態についてであり, Perf. は終了点を越えた事態の様相である。

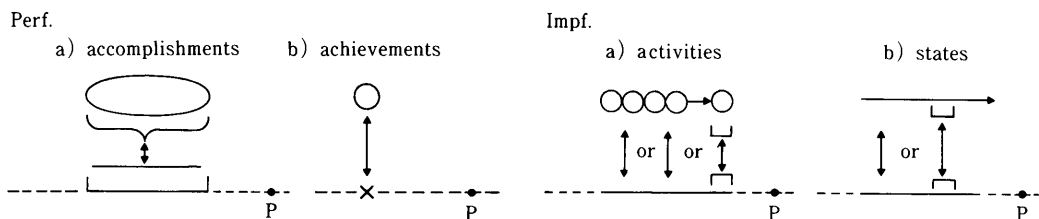


図11

2.4. アスペクトの下位範疇

2.4.1. Iterative と Habitual

先にも述べたように, アスペクトをあまり細く分けることは意味がない。しかし, 他のアスペクトと区別を要するものがある。下の例文のように現在の習慣を表わすものと, 職業を表わす場合のアスペクトがその一つである。

- (18) John gets up at six o'clock.
 (19) John comes to school by bus.
 (20) He plays the violin as a concertmaster of the orchestra.

これらの文は、Perf. に属するか、Impf. に属するか簡単には決められない。判断の困難さの理由は、この「現在時制」にある。というのは、これらの文を過去時制で書くと、(18), (19)は Perf. であり、(20)は Impf. である (activities) と考えられる。(18)と(19)については、過去時制で表わされると、*used to* ～, *would* ～ という特別の形を用いないと、一回限りの一つの行為とみなされ、くり返して行なわれる習慣性は出てこない。これらの文の過程は、ある一定の間隔でかなりの回数くり返されている。これは Perf. の過程のとらえ方に似ている。図12の○は *get up at six o'clock* という行為を表わしている。

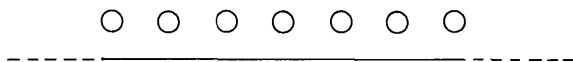


図12

しかし、時間に関しては、過去から現在—そしておそらくそれ以後も少し入るであろう—にかけての時間帯が問題となり、時間には境界がなく、視点は過程内のどこでも良い。時間に境界がない点など、Impf. のそれである。ここで、現在時制で書かれていることを考え直してみると、過去のことも現在と一まとめに考え、過程を一個一個の固まりとは考えず、一つの状態が続いているように認識されていることが浮び上ってくる。つまり、本来過去時制でないと、一個の過程として認められない過程が現在の一瞬時で書かれることによって、その固体性を失って「ある行為を定間隔にもった状態」となったと考えられる。つまり、全体性を失い、部分性を持った性格を有したのである。例えば、次の例文はより状態としての性質を帯びている。

- (21) Do you smoke ?

これは、本来は(20)同様、activity であるが、ここではその行為性よりも状態性が強調されている。これを進行形にすれば、例文(22)のように状態性は無くなり、activity が明確になり、問題とされる期間が短くなる²¹⁾。

- (22) Are you smoking ?

職業を表わす文についても同様であるが、アスペクトを考えるならば(20), (21)は Impf. で変りはないが、詳しく言えば、その situation は activities より states と考えた方が自然である。職業も現在の習慣についても、states とみなして Impf. の中に入れた方がよいと思われる。ただし、他の Impf. と同様に扱うのは問題があるので、下位範疇の習慣相 (Habitual) として、他の部分と区別する必要がある。

現在の習慣とよく似た過程を持つのに反復、くり返しがある。この過程の特徴は、頻度をあらわす副詞と表われるように、行為は一つ一つ数えられている。従って、名詞で言えば count noun 的であり、ここでいう total situation をあらわしている。Comrie (1976) が、「習慣も本質的には反復と同じである」と述べているように、本質的にはある行為が等間隔でおこる (回数は反復の方が少ないと思われる)。しかし、時間のとらえ方が反復と習慣では異なる。反復は、初めの行為の始まりの点から、反復が終わる時点まで限定されている。例文(3)の場合を考えてみる

と、第一回目の爆発から三回目の爆発まで時間に境いがある。これを図式化すると図13のようになる。

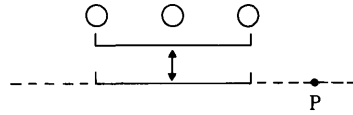


図13

反復の場合、一つ一つの行為全体を一つと見ているとも考えられる。理由はこの事態は分割して述べることは不可能であり、必ず三回をトータルした事態を問題にしているからである。従って、反復は Perf. の一部であると考え、他のものと区別するために、反復相 (Iterative) として Perf. の下位範疇におく。

2.4.2. 進行相 (progressive)

2.2.でも述べたように、進行相 (Prog.) は他の Impf. と区別する必要がある。その理由の一つめは、この Impf. の下位範疇である Prog. は、進行形 (progressive-form) という特別な形式をとるということ。二つめは視点は必ず過程の途中になくなくてはならない点である。つまり、視点は決して、過程の終了点に来てはならない。現在時制で用いられる時は、視点は P であるが、P 以後も行為は続いていなくてはならない。Prog. の特徴の一つに、過程の途中に視点があるが、暗にその前後の時—あまり広くないのも注意する必要がある—をも話題にしていると言えることが挙げられる。普通、進行形が用いられるのは、進行形で表わされない場合には事態が accomplishments と activities であることが多い。両方とも時として期間 (duration) を含んでいる。従って、その期間の中に視点を置くことができる。Accomplishments の場合は図14(a)で示すように、終了点に向かって進行している途中に視点を置く。従って、聞き手は、終了点の存在を知り、行為がその途中であり、終了点に向かって進行中であることを理解する。

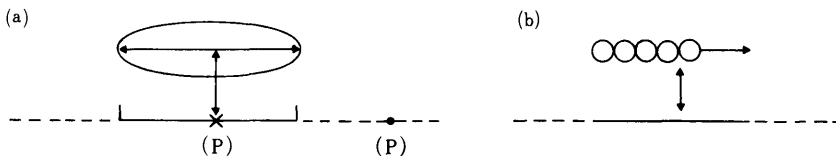


図14

Activities の時は、進行形で表わされることによって、視点の比較的短い前後の時間にずっとその行為が均質に継続されていることを示す。

いわゆる進行形にはならないと言われている動詞が、状況によっては進行形になりうることもあるが、それはどういう変化を事態にもたらすのか簡単に考えてみたい。

(23) a. John won the race.

b. John is winning the race.

(24) a. My sister lives in London.

b. My sister was living with me.

(23) a. は achievement であるが、b. のように表現されるときもある。それは過程の視点が現在点 P

であり、その時点での行為が *John is winning the race* であり、その P の前後の比較的短い期間も同様な行為がなされていると見なされている。従って *win the race* という均質な過程が続いて、徐々に達成に向っていると考えられる。つまり、b. では事態は achievement ではなく activity と見なされている。(24) a. と (24) b. についても前節で見たように進行形になることによって (b) の事態は 'activities' に変わっていると思われる。以上のように、進行相の表わしている situation は activities と見なされる。しかし、進行相は他の Impf. と異なって、時間の設定が短いことと、終了点とその比較的短い時間の終りに予期されており、視点の時点ではそれに向って、行為が進行中である点が特徴としてあげられる。アスペクトの下位範疇をまとめると、表 2 のようになる。

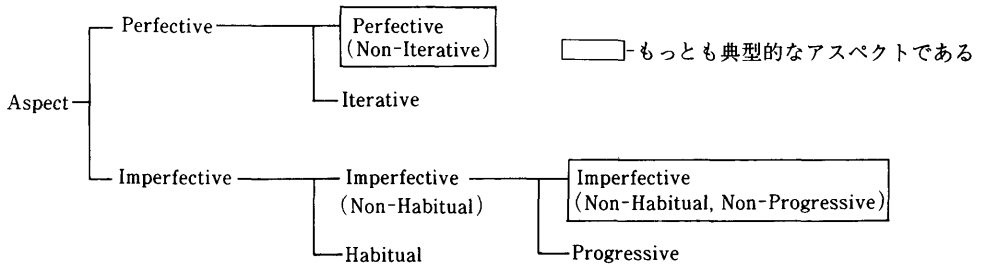


表 2

3. アスペクトに関与する素性

3.1. 動詞に内在する特徴—bounded/non-bounded

アスペクトは文全体で表わされる事態で考察されるべきであるが、アスペクトを構成する主要な部(柱)である過程、時、視点のうち、過程が最も大切であることは疑う余地のないところである。この節では、この過程の中心をなす動詞に焦点をあてて、アスペクトと関係ある特徴を考察してみる。Vendler が動詞を中心に 4 つの型に分けたように、アスペクトの決定には動詞が中心的役割を果たす。むしろ、それは語彙の領域に関する意味的な特徴ではなく、動詞自身がもつ文法的な特徴である。

Perf. の accomplishments, achievements を表わす動詞と、Impf. の activities と states の動詞を比べると次の二点が明らかになる。(1) Perf. の方は goal, 又は動作の終了点へ向く行為を必要とするが、activities は均質な動作、states は状態が続くので、終了点は必要ない。(2) activities と accomplishments は同じ動詞が前者は自動詞として、後者は他動詞として使われることがある。まず、より重要と思われる(1)の方を考えてみる。Goal の方へ向っている行為を含むということは、その行為の終了点が設定されているということである。行為が完結した後でしか下の文は言えない。

- (6) John wrote the letter.
- (25) John drew the circle.
- (26) John arrived at the station.

(23) a. John won the race.

(6), (25)は accomplishments, (26), (23) a. は achievements であるが、どれも過程の中に終了点を含んでいる。終了点を含むということは、過程が限定されている。つまり動作の始点から終了点までの境界を持っているということである。Achievements についても動作の達成の時点のことであるから、始点の方は問題にしていけないが、これは逆に言えば、始点と終了点とがきわめて近いため瞬時になったとも考えられるが、そういう意味も含めて、過程には境界が設定されている。又、accomplishments も achievements もその行為の終了点以前と以後では事態に変化がある。従って、終了点という境界に限定された特徴をとらえて、これらの動詞を境界動詞 (bounded verbs) と呼ぶ⁽²²⁾。又、過程に境界を必要とする動詞の特性を境界性 (bounded) と呼ぶことにする。これに対し、次の例文の動詞は過程に境界を必要とせず無限に続く可能性がある。

(27) John walked around.

(28) John ran and ran.

(29) John resembles his father.

(30) John loves Mary.

これらは終了点を必要とせず、これらの過程には境界はない。これらの動詞には境界性は存在せず、無境界動詞 (nonbounded verbs) と呼ぶことができよう。境界動詞は、アスペクトを構成するもう一つの柱である「時」の限定性とも多いに関係をもつと考えられる。

しかしながら、ある特定の動詞は必ず bounded verbs に属すると決めるのは困難である。境界動詞であるとはっきり分類できる動詞は限られており、実際はある状況では境界性を持ち、又、ある状況のもとでは境界性を持たなくなる。絶体的とは言えないが、大体の傾向として境界動詞としてしか用いられない動詞は主に achievements を、無境界動詞としてしか用いられない動詞は主に states を表わすことが多い。これに対し、activities と accomplishments に用いられる動詞はどちらかに分類してしまうのが困難なものが多い。

(28) John ran and ran.

(31) John ran a mile.

(32) Mary sang to her baby.

(33) Mary sang one of Schubert's lieder.

(28)と(31)は同じ RUN, (32)と(33)は同じ SING という動詞を用いているが、(28), (32)は activities で、(31), (33)は accomplishments を表わしている。(31)も(33)も *a mile, one of Schubert's lieder* の存在によって、終了点が設定され、過程に境界が必要となる。従って、この時の RUN も SING も〈+ bounded〉である。これに対し(28), (32)には境界は必要なく〈- bounded〉である。この場合は目的語の有無が関係しているようであるが、それだけではない場合もある。この点については次の節で検討することにする。ここでは、アスペクトには動詞の境界性が関与しており、Perf. と境界性は強い結びつきがあることを明白にするにとどめる。ただし、動詞によっては境界性を帯びた動詞となったり境界性を失ったり、他の条件によって左右されることを述べるにとどめることにする。

3.2. 動詞以外の要素

3.2.1. 他動性とアスペクト

動詞はアスペクトに境界性という素性で関与するが、アスペクトだけではプラスにもマイナスにも働きる動詞が多いことを見てきた。次に、どのような要因が動詞の境界性に影響を与える

のか検討していくことにする。さらに動詞以外にどのようなものが、アスペクトと関係あるのか考えてみたい。これらのことを考察するとき、Hopper and Thompson (1980) の示した他動性のパラメーター、つまり問題となる文がどの程度の他動性を持つかを示すパラメーターとアスペクトに影響する要因と重なる点が非常に多いのに驚かされる。Hopper and Thompson (1980) は表 3 に示されるように A ～ J まで 10 のパラメーターを示している²³⁾。

	High	Low
A. PARTICIPANTS	2 or more participants A and 0	1 participant
B. KINESIS	action	non-action
C. ASPECT	telic	atelic
D. PUNCTUALITY	punctual	non-punctual
E. VOLITIONALITY	volitional	non-volitional
F. AFFIRMATION	affirmative	negative
G. MODE	realis	irrealis
H. AGENCY	A high in potency	A low in potency
I. AFFECTEDNESS OF O	O totally affected	O not affected
J. INDIVIDUATION OF O	O highly individuated	O non-individuated

表 3

上記のパラメーターはアスペクトに影響するものと重なるものが多いが、アスペクトと他動性とが完全に異なるのは「時」との関係においてであると思われる。A については、先に少し述べたように、又、これ以後もさらに詳しく観察していくが、関与者 (participants) が二つの方が一つの場合より Perf. になりやすい。又、C の ASPECT のところを見ると、telic な方が atelic より他動性が高いとなっているが、Hopper and Thompson は、telic を perfective と、atelic を imperfective と同じ意味で大きな差なしで用いている²⁴⁾。つまり、Perf. をもつ文の他動性は Impf. のそれより高いということになる。直感的にも、過程が完結するためには他動性は強い方が望ましいと思われるが、Hopper and Thompson の表の High のところに Perfective, Low のところに Imperfective を入れて成りたてば、他動性とアスペクトはシステムテックに関係しあっていることになる。「アスペクトは動詞の他動性と組織的に関係している。もしその文のアスペクトが完結相なら—そして他の条件が同じであるならば—その解釈にはその文が他動性の高い方に分類させうる特性がある。また、非完結相なら、他動性の低いものであると示されうる。」²⁵⁾と、Hopper and Thompson が注目しているこの関係について具体的に見ていくことにする。

他動性についての Hopper and Thompson の言及の中で最も興味深いのは、Finnish の目的語の accusative case と partitive case の例である。

- (34)²⁶⁾
- | | | | | |
|----|--|-----------|---------------|---------------|
| a. | Liikemies | kirjoitti | kirjeen | valiokunnalle |
| | businessman | wrote | letter (ACC) | committee |
| | 'The businessman wrote a letter to the committee.' | | | |
| b. | Liikemies | kirjoitti | kirjettä | valiokunnelle |
| | | | letter (PART) | |
| | 'The businessman was writing a letter to the committee.' | | | |

上の例では、accusative case は、目的語は全部作用された時（手紙が全部書かれたといいこと）に用いられ、その文は Perf. と解釈される。一方、(b)の場合、目的語は一部しか行為を受けず（手紙は途中でしか書かれていない）、文は Impf. に解釈される。Finish では accusative は目的語が全部完結された時にのみ用いられ、述部の行為が決められた点、又は段階にまで達していないか、していないとみなされた時、目的語は partitive case となる（Hopper and Thompson, 1980）。この記述は、行為の終了点の設定を必要とするか否かの bounded/non-bounded の対立を思い起こさせる。行為が終了点に達していないとみなされる場合と、過程に境界が設定されていない場合と似ているからである。

Finish では目的語が total なものか、partitive なものかということが Perf. か Impf. かの解釈に関係している。英語ではこのような目的語の形態上の区別はなされないが、目的語が完全に述部の過程によって到達されているのか、又いないのかということは、目的語が分割できない一つのものであるか、または分割した場合の部分であるかどうかということである。換言すれば、英語においては、目的語がその性質上部分を取り出すことが可能かどうかの問題であると言える。

- (6) John wrote the letter.
- (35) John painted the picture.
- (31) John ran a mile.

(6)の例文では *the letter* は count noun であり、*write the letter* という行為はすでにみたように、total situation であり、途中で分割できない。従って、過程の途中に視点があるときは、進行形を用いて、事態は activity であり、partitive situation となる。(35)についても同様で、絵を描き始めて終えるまでの期間を全体で一つにしており分割はできない。これに対して、次の例文の目的語は *water, grass* で mass noun であり分割が可能である。

- (36) John drank some water.
- (37) The ox ate grass.

(36), (37)は、目的語は *water* と *grass* で量には関係なく、*water* であり *grass* である。つまりこれらの目的語は部分を取り出すことができ partitive である。しかも、これらの事態も、例えば(36)では、一口飲んでもコップ一杯の量を飲んでも、それには関係なく *John drank some water* は真であり、partitive situation でアスペクトは Impf. である。一方、次の(38)の例文では、飲みはじめと、終了点があり、total situation で、アスペクトは Perf. である。

- (38) John drank a glass of water.

(36)と(38)を比べると、動詞 DRINK は目的語の性質によって終了点が必要になったりならなかったりすることが明らかになる。境界動詞として働くか、無境界動詞として働くかは目的語に左右される。今問題にしたのは目的語の count/mass に関する対立であるが、次の(39), (40)のように分割可能かどうかだけでは不十分な場合もある。

- (39) John wrote letters.
- (40) John drank all the water.

(39)の場合、目的語は count noun であるが、これは例えば手紙が10通あるとして、4, 5 通書いたところでもこの文は真であり、10通全部書き終えているかどうかは問題ではない。つまり activities と解釈される。ここでは目的語の複数化によって、事態が変化した。目的語に限定をつける

と又事態は変化する。

(41) John wrote all the letters.

(41)では行為の終了点が必要となり、動詞は境界動詞として働き、アスペクトも Perf. となる。(40)の場合でも、*water* は mass noun であるが *all* をつけると境界が生じ、アスペクトは Perf. と解釈される。*All* によって *water* が一固まりと考えられるのであろう。次の例文は Perf., Impf. の両方に解釈が可能であると思われる。

(42) John drank the water.

(43) John wrote the letters.

以上のことから、動詞に境界性を持たせ、situation に影響を与えるのは目的語の count/mass の対立よりも、total/partitive であることが明らかとなる。つまり目的語が total と解釈されるか、partitive と解釈されるかが重要となる。

また、このことも関連があるが、例文(8)では目的語は count noun で、total であるが、2章で検討したように、この文の事態は activities であり Impf. と解釈される。

(8) John pushed a cart.

ここでは PUSH A CART 全体で、(28), (32)の RUN, SING などと同じ働きをしていると思われる。(8)の目的語 *a cart* はここでは非常に被作用性 (affectedness) が低い。この文は他動性のパラメーター I では低い方をもつ。又、このことと、無境界動詞として働いていた動詞が(40), (41)のように、目的語を限定するものがつくと、境界動詞として働くようになることと関係があるようである。多くの言語では、目的語が非限定的か (indefinite)、非明示的 (non-referential) のとき、目的語は動詞に吸収されて自動詞化することがあり、又、他の言語では非限定的な目的語 (indefinite object) は自動詞とみなされる (Hopper and Thompson, 1980)。英語は形態上は、非限定的な目的語を自動詞と結びつけることはないが²⁷⁾、(8)の場合は目的語の非限定性、被作用性の低さによって自動詞的な解釈を受けていると思われる。3.1.で考察したことから、このことを考え合わせると、境界性が不確かな動詞の場合、他動詞で使われる時、文は Perf. に、自動詞として、または自動詞と理解されている時には文は Impf. に解釈される傾向にあると言えるであろう。他動詞の方を考えると、パラメーターの A の PARTICIPANTS のところで、関与者が二つ以上の時 (つまり他動詞) の方が高い方に、一つの時の方が低い方になっている。ここでは他動性の強い方が Perf. に、低い方が Impf. に理解されることと結びつくようである。

INDIVIDUATED	NON-INDIVIDUATED
proper	common
human, animate	inanimate
concrete	abstract
• singular	• plural
• count	• mass
• referential, definite	• non-referential

表 4²⁹⁾

又、例文(39)と(41), (36)と(40)のアスペクトの違いは、明らかに目的語の限定性 (definiteness)、明示性 (referentiality) と関係があると思われる。この節で考えてきた目的語の count/mass, 単

数／複数，限定／非限定などの違いとアスペクトのことを考察する際に興味深いのは，先のパラメーターで挙げられたJの目的語の個別性（Individuality）の概念である。Hopper and Thompsonによると目的語がより個別化されている（highly individuated）方が，個別化されていない（non-individuated）方より他動性が高い。Hopper and ThompsonのIndividuationの分類は特に注目に価する。表4の左の列の特性を持った名詞の指すものの方が，右の列の特性を持ったものより高度に個別化されているとしている²⁸⁾。表4の下3行の対立は，ちょうど我々が目的語について問題にしてきた点と同じである。しかも，個々の対立をみても，左列の特性をもった名詞が目的語の場合と右列の特性をもった名詞が目的語になった場合とを比べると，左列の特性をもった名詞，つまり高度に個別化された名詞が目的語になった時の方が，文はPerf.であると解釈される。名詞の個別性とアスペクトが関係あることは，今まで見てきたように明らかである。ここでも他動性の高い方と，Perf.が結びつき，低い方とImpf.が結びつく傾向にあることが証明された。

目的語が個別化されるということは，より一つ，一つ，一つの固まりと理解されやすいということになる。この性質が動詞の境界性と結びつくと，過程には終了点があり，situation全体が完結されたもの（total situation）としてみなされ，文はPerf.と解釈される。より個別化されていないということはpartitivityを持つということであり，事態はImpf.と解釈される。ここでアスペクトを考える時には文構造では述部のレベルで考えた方が過程が良く理解されて良いことが明白となる。つまり，動詞の境界性と，目的語の個別性の両方のつながりを考えて事態の理解の手がかりとするということである。述部で表わされている内容が，全体でみなくてはならないものか，部分的なものかという点が非常に重要となってくる。

• V	(+ O)	}	telic-predication -----> Perf.
〈+ bounded〉			
• V	+ O		
〈± bounded〉	〈Individuated〉	}	atelic-predication -----> Impf.
• V	+ O		
〈± bounded〉	〈Non-individuated〉		
• V	(+ O)	}	
〈- bounded〉			

表5

他動性に関してはA, B, (C), I, Jについては，確かに他の条件が同じであれば，他動性の高い方がPerf.と解釈されやすいことが明らかとなり，他動性とアスペクトは互いに関連があることは明白である。

3.2.2. 主語

アスペクトは動詞が中心であるため，主語の性質とアスペクトの関係はあまり考察されない傾向にあるが，次の例文で見られるように主語もアスペクトに影響を与える。

- (44)³⁰⁾ (a) Sally went from Phoenix to Jucson.
 (b) This road goes from Phoenix to Jucson.

(a)はPerf., (b)はImpf.と理解され，その違いは主語の違いに因ると思われる。Langacker (1982)

の説明によると、GO FROM PHOENIX TO JUCSON は(a), (b)で同じ空間を占る。これだけの空間を完全にうめるのには必要となる時間的、空間的影響を与える主語の特徴の違いが鍵となる。Sally は少いので一度にこれだけの空間をうめることはできないが、道路は長いので一時にこの空間をうめることができるということである³¹⁾。(a)を図式化すると図15のようになる。Activities は空間の設定によって境界ができ、accomplishment となったと理解できる。

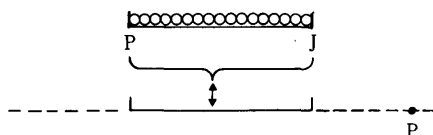


図15

一方(b)では主語 *road* がこの空間を移動するのではなく、時も限定されず、これは *states* である。他動性のパラメーターの B, E, H が関係しており、さらに、Langacker (1982) が曖昧であるという(45)の例文では、B, D, I が関係している。Achievements (分かれた瞬間)か、*states* (分けられている状態)の違いが考えられる。

(45)³²⁾ The crowd divided into two groups.

ここでは主語の性質、時間が限定されるとも、制限無しとも理解できる点が問題となるのである。Carlson (1981) にあげられた下記の例文は主語によって事態の理解され方が異なることを示している。

- (45)³³⁾ (a) Water came in.
 (b) The water came in.
 (c) Some water came in.
 (d) All the water came in.

もし、同じ predicate で主語が *John* であれば、文は *John come in* となり achievements で Perf. と解釈される。しかし、(45(a))のように *water* になると、時間的にも、過程にも境界は無くなり、主語からの刺激により均質の行為が続くので Impf. と解される。一方、(b)と(d)は、Perf. であるが、(c)はあいまいである。(b), (d)は *the* 及び *all the* がつくことによって個別性の高い名詞に変わったと考えられる (*John* ももちろん個別性の高い名詞である)。(a)は telic-predication に個別性の低い名詞が主語として用いられたため activities と理解されることが考えられる。

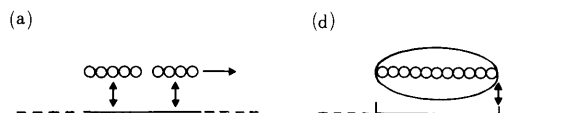


図16

このように主語の名詞の性質も大きな影響を及ぼす。特に主語は過程の source と理解されやすい位置であるので、その名詞が境界を持つ一つと考えられる名詞か、それとも分割可能な部分性を持つ制限をもたない名詞かによって、同じ述部の内容であれば、Perf. か Impf. か問題となる文

の aspekto の解釈に影響を与えるのである。

4. 結 論

アスペクトは、過程、時間、視点の三つの主要構成部によって構成される。過程は終了点があり一つの固まりとみられるか、分割可能なものとみられるか、時間は限定されているかいないか、視点は過程の終了点にあるか、過程の内にあるのかによって、完結相、非完結相に分けられる。完結相は文で表わされた事態を完結した一つの出来事とみなした時に解釈され、そうでない時に非完結相と解釈される。

英語にはアスペクトを示す文法形式が十分でなく、下の表の左列 (High) の特性が多いもの程完結相として解釈されるのである。

	High	Low
A. Time	definite	indefinite
B. Subject	highly individuated	non-individuated
C. Predicate	telic	atelic
a. Verb	+ bounded	— bounded
b. Participants	2 or more	1
c. Individuation of 0	0 highly individuated	0 non-individuated
D. Transitivity	high	low

表 6

アスペクトを論ずる上で最も重要な点は、境界から境界までの事態全体を個別なものとして見るか、境界とは関係なしに事態のどの部分でもその事態を見ることができるとあることが明らかとなった。つまり、全体を問題とするかその一部でも全体の意識なしに問題にできるかということが大切なのである。完結とみるか非完結とみなすかは、全体を一つとみるか、全体は考えずに部分を見るか、つまり全体性 (totality) を持つか、部分性 (partitivity) を持つかにかかっていると結論づけられるのである。

註

- 1) Zandvoort (1962), p.124.
- 2) Quirk et al. (1985) は英語には perfective/non-perfective, progressive/non-progressive の対比の2つのアスペクトを認めている。英語のアスペクトは時制との関連が強く、またこれら2つのアスペクトが重なって用いられることもあるとして、次の頁の表7に示した組み合わせができとしている (p.189)。
- 3) Comrie (1976) もいわゆる完了形を perfect と呼び、perfective から区別して考えている。
- 4) Quirk et al. でも “…… present perfective signifies past time ‘with current relevance.’” と述べている (p.190)。
- 5) Mourelatos (1981) は, “Corresponding to an event predication there is a nominalization equivalent in which the original verb appears as a gerund or deverbative noun (suffixes typically

SYMBOL	NAME	EXAMPLE
Type B	present perfective (simple)	he has examined
	past perfective (simple)	he had examined
Type C	present progressive (simple)	he is examining
	past progressive (simple)	he was examining
Type BC	present perfective progressive	he has been examining
	past perfective progressive	he had been examining

表 7

ion ment, al, ure) that governs an existential construction of the verb to be.”と述べて色々な例をあげている (p.204)。

6) Mourelatos (1981), p.204から引用。

7) Mourelatos (1981) は、註(6)の部につづけて “If the number of occurrences is specified by an adverb in the original version, the number appears as a cardinal numeral modifying the gerund in the nominalized version.” と言っている。

8) Mourelatos (1981), p.204から引用。

9) Mourelatos (1981), p.206から引用。

10) Mourelatos (1981), p.208から引用。

11) Mourelatos は situations を下のように分けている (p.201)。

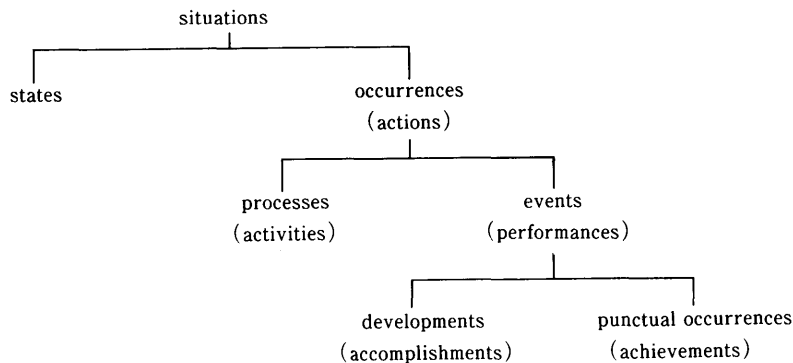


表 8

12), 13) Mourelatos (1981), pp.202~210.

14) Langacker (1982) は過程を trajectory でとらえ, perfective process は full trajectory の概念を含み, imperfective process と states は trajectory では描けないとして、図17のように書いている (p.266)。

Full trajectory は時間の経過とともに起こる変化を含んでいるという点で我々の考える Perf. とほぼ同じであるが、この図の終りの→は以後同じように続くということであり、不適切である。その理由の一つは、全体を一つとみるといくより、action の連続で activities の過程をあらわしているような印象を与える点である。第二点として、STATE を○で表わし、時間を点とみなす

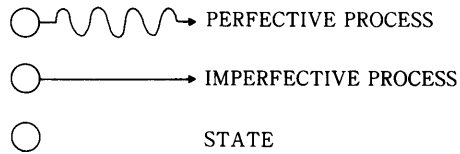


図17

のは不自然であることが挙げられる。

15) Langacker (1982), p.266.

16) Langacker のここでいう STATE の Predicate は RED, TALL など BE 動詞と伴に表われるものである。我々の situation をあらわす state は Langacker の分類では多く IMPERFECTIVE PROCESS に入る。

17) Vendler (1967), pp.106~107.

18) Vendler (1967), p.107.

19) Vendler (1967), p.106.

20) Vendler (1967), p.106.

21) 現在の習慣を表わす文が、進行形であらわされると、問題としている時間が短くなり、一時的なものとはするのは興味あることである。

The professor types his own letter.

The professor is typing his own letter while his secretary is ill. (Quirk et al., p.199)

上の文は、過去形で表わすと、accomplishments であるのが普通である。

22) このような特性に注目して分類したものに、Jespersen (1965) の 'conclusive verb' 対 'non-conclusive verbs' や, Garley の Telic 対 atelic などがあり, 歴史的にもアリストテレスに端を発している。telic 対 atelic の訳語に Dahl (1981) は bounded 対 nonbounded をあてている。

23) Hopper and Thompson (1980) は "we propose to isolate the component parts of the Transitivity notion, and to study the ways in which they are typically encoded by languages. We have identified the following parameters of Transitivity, each of which suggests a scale according to which clause can be ranked." (p.251) と述べ, このように A ~ J まで示した (p.252)。

24) Hopper and Thompson (1980) は, telic/atelic を grammer で, perfective/imperfective は discourse で用いるとしているが, 彼ら自身もこれらに根本的な差はないと見ている。

25) Hopper and Thompson (1980), p.271.

26) Hopper and Thompson (1980), p.262.

27) 他動詞構文と自動詞構文を形態上区別する言語があり, そのような言語では限定的な目的語と非限定的な目的語を区別し, 後者—つまり無標という意味—と自動詞構文が結びつく傾向にある (Hopper and Thompson, (1980))。

28) Hopper and Thompson (1980), p.253.

29) ・印は original にはない。

30) Langacker (1982), p.274より引用。

31) Langacker (1982), p.275.

32) Langacker (1982), p.274より引用。

33) Carlson (1981), p.51より引用。

参 考 文 献

- Chaleston, B.M., 1955, A reconsideration of the problem of time, tense, and aspect in modern English, *English Studies*, vol.36, pp.263—278.
- Comrie, B., 1976, *Aspect*, Cambridge: Cambridge University Press.
- , 1981, Aspect and voice: some reflections on perfect and passive, *Syntax and semantics*, vol.14, pp.65—78.
- Carlson, L., 1981, Aspect and quantification, *Syntax and semantics*, vol.14, pp.31—63.
- Curme, G.O., 1931, *A grammar of the English language*, vol.Ⅲ, Syntax, New York : D.C. Heath.
- Dahl, Ö., 1981, On the definition of the telic-atelic (bounded-nonbounded) distinction, *Syntax and semantics*, vol.14, pp.79—90.
- DeLancey, S., 1982, Aspect, transitivity and viewpoint, In Hopper, pp.167—183.
- Givón, T., 1979, *On understanding grammar*, New York: Academic Press.
- Hopper, P. and Thompson, S.A., 1980, Transitivity in grammar and discourse, *Lg*.56, pp.251—299.
- Hopper, P., 1982 (ed.), *Tense-aspect: between semantics and pragmatics*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Jespersen, O., 1965, *The Philosophy of grammar*, London: W.W. Norton & Company.
- Langacker, R., 1982, Remarks on English aspect, In Hopper, pp.265—304.
- , 1987, Nouns and verbs, *Lg*.63, pp.53—94.
- Mourelatos, A., 1981, Events, processes, and states, *Syntax and Semantics*, vol.14, pp.191—212.
- Palmer, F., 1965, *A linguistic study of the English verbs*, London: Longman.
- Quirk, et al., 1972, *A grammar of contemporary English*, London: Longman.
- , 1985, *A comprehensive grammar of English language*, London: Longman.
- Tedeschi, P. and Zaenen, A., 1981 (ed.), *Syntax and semantics: Tense and aspect*, vol.14, New York: Academic Press.
- Tsunoda, T., 1985, Remarks on transitivity, *JL*.21, pp.385—396.
- Vendler, Z., 1967, *Linguistics in philosophy*, London: Cornell University Press.
- Zandvoort, R.W., 1962, *A handbook of English grammar*, (2 nd ed.) , London: Longman.